

## 連載 プロマネの現場から

### 第 59 回 スキーの魅力

蒼海憲治（大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ）

40歳過ぎてから、スキーを再開しました。数年前、同じプロジェクトと一緒に仕事をした10歳以上年上の先輩が50歳を超えた現在でも、年に10回はスキー場に通っているということに触発されて、18年ぶりにスキーに行ったのでした。上手くはないものの、自転車と同じで、一度身体で覚えたことはなかなか忘れていないはず、と思って、いきなりゴンドラに乗って降り立ったところ、さあ大変。身体をどう動かしたら、左右にターンできるか、ということさえ見事に忘れてしまっており、冷や汗と文字通り、大汗をかきながら、40分ほどかかってなんとか下に降りてくることができました。ただちに、スキースクールに申し込みました（笑）。

現在も、下手の横好きの域を出ないのですが、この時以来、毎冬、休みが取れる週末は、たとえ日帰りでも、せっせとスキー場通いするようになりました。

最近のスキー場は、バブルの頃と違って、リフトに一時間待ちなどということはめったになく、食事も充実しています。

自分がスキーを再開したせいか、意識していることの情報が集まりやすいというカーパス効果もあり、最近、気がつくのは、40歳を越えてスキーを始め、その魅力に目覚めた人が結構いることです。みなさんのはまりっぷりと、そのスキー哲学というべきものに、共感することしきりです。

ソニーの創業者であった盛田昭夫さんは、若いころからゴルフ一筋だったそうですが、60歳でテニスを始め、65歳になってからスキーを始め、67歳でスキューバダイビングを始められています。スキーについては、シーズン中は毎週のように安比や旭川のカムリ・リンクなどのスキー場へ通ったといいます。盛田さんのスキーに臨む姿は、大前研一さんがこう描いています。

・・・年をとってから始めると、傾斜のきつい坂を滑降するには勇気がいる。

そこで氏は、若手女性社員たちも呼んで、彼女たちの前で「勇気、勇気」と心の中で叫びながら滑ったそうだ。（\*1）

そして、スキーをもっと早くはじめていればよかったと言った、ともいわれています。

ところで、スキーの魅力とは何でしょうか？

#### 1. 白銀の世界

まず、一面の真っ白なゲレンデの美しさとそこでの爽快感、リフトや頂上からみた景色の美しさや雄大さがあります。

## 2. 滑走の快感

朝一番、整備されたばかりで、スキーやボードの跡が一つもついていないゲレンデを滑るときの心地よさは格別のものがあります。

滑走時は、ジェットコースターに似たゾクゾク感があり、また、真下に落ちるような感覚のする急斜面に向かうとき、恐怖心とともに、そこを滑り降りる時の快感、スリルを感じることができます。

## 3. スピード感

風を全身に感じながら、ゲレンデを疾走するときの気持ち良さは、日常ではなかなか味わえません。

## 4. 新鮮な空気

摂氏0度前後の空気は、冷たいだけでなく、清らかな気がしますが、この空気を胸一杯に吸い込むことで、リフレッシュできます。

## 5. スキルに応じた楽しみ

たとえボーゲンしかできず、初心者コースしか滑れない時でも、スキルに応じた楽しみ方ができます。

## 6. クタクタになれる

朝食後の8時過ぎからゲレンデに出て、夕方リフトが止まる5時前まで、まるまる一日をゲレンデで過ごす。文字通り、クタクタになることができます。

デスクワークの欠点は、心が疲れているにもかかわらず、身体が疲れていない点にあります。心と身体のバランスを取るために、身体を使うことが大切だと思っています。

## 7. 筋肉痛も楽しみ

日ごろ使わない筋肉を使うため、滑走後は、筋肉痛に襲われます。

でも、この筋肉痛の痛さも、楽しみの一つになります。

## 8. 夢中になれる

急な坂に対峙している時は、どうこの坂を滑り降りるかを考えるだけで精一杯です。

無我夢中で滑っている時は、日常のことは一切頭になくなっていきます。

誰かと滑っていても、滑り降りている瞬間は、一人になります。

他人のことは、眼中になくなります。

## 9 . 心と体が開かれる

スキーが上手になるコツは、ただひとつ。

心を開き、からだを開くことだ。

言い方を変えれば、雪と斜面と友達になることである。 (\* 2 )

心が閉じていると、雪との決闘になって復讐されます。スキーは雪との格闘技ではありません。心を開き、からだを開く。雪と斜面に友達になってもらうことが大切です。だからこそ、心を開ざしがちな人こそ、スキーがその心を開いてくれるのかもしれない。

制動したいと思ったら、むしろからだを前に投げ出すのが制動の原則的な技術だが、ターンでもこれはいえる。深い谷底に身を投げ出してこそ、安全で確実にスムーズなターンができる。

谷に対して正面を向くこと。これは大事な心得である。 (\* 2 )

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、ということを実感する瞬間です。

## 10 . 温泉を楽しむ

スキー場のある山の麓の多くには、良い温泉があります。疲れた身体が、温泉の湯に入ること、癒されていくのを感じるのは、なんとも気持ちのよい時間です。

このような魅力満点のスキーですが、これらをスキー道、スキー哲学のように捉えていた人がいます。それは、画家の岡本太郎さんです。太郎さんは、46歳で初めてスキーを始めたのですが、その後、スキーにはまりまくったのでした。

私がスキーにこんなに熱中しているのは、このスポーツの優美さ、

スピード感にほれたばかりではない。

猛烈な斜面に身体を投げだしていくときの、いのちがブルッとするような衝撃、

あれが何ともたまらないのである。 (\* 3 )

この太郎さんのスキー哲学は、『岡本太郎の挑戦するスキー』という本に記されています。しかし、この本が所収されている『岡本太郎著作集 第8巻 岡本太郎の眼』(\* 4)ともども、残念ながら現在、絶版になり、古書のオークションサイトでは、1万円を超える高値がついています。なかなか手に取る機会がないと思いますので、少し紹介してみます。

真っ白な急斜面に挑むとき、血がわき上がり、全身が爆発する思い。

スキーというのは、ほんとうにスリルにみちた命がけのスポーツである。

考えてみると、スキーというのはまったくユニークなスポーツである。  
たった一人で、へただろうがうまだろうが、あのくらい平気で身を投げて打ち込める  
スポーツは他にはない。たった一人で、というところがいいのだ。

野球やサッカーなど他のスポーツは、相手がなければプレーできない。  
そして、他のスポーツは、うまいものだけが得意気な顔をしてプレーをし、  
その他大勢は、観客にまわってしまう。それが気に入らない、といいます。

スキーこそ、自分のなま身で挑む“やるスポーツ”の代表なのだ。

へたくそで、ギクシャクしていても、不思議に楽しい。  
“見てくれ”なんてどうでもかまわない。  
へただから恥ずかしいなどというコンプレックスを誰も持たない。  
斜面に思い切って突っ込む。  
そして瞬間に、スッテンと猛烈にひっくり返る。

これは、名選手のプレーを見て興奮するよりも、はるかに強烈な、直接的なセンサー  
ションだ、といいます。

うまく滑ろうがへたに滑ろうが、別に人から見られているわけではない。  
一番それにまともにぶつかっているのは自分自身だ。  
俗に壁にぶつかると言うが、“壁”と言っても、それは実は自分自身なのであって、  
他のスポーツの場合は、壁は条件的他者であり、また人の目が壁なのだ。

ところがスキーの壁というのは、自分自身、自分の肉体的条件、精神的条件だ。  
たしかにスキー場で、上手い人の滑りを見ると、うらやましい気持ちになります。  
でも、あんな風に滑ってみたい、あの技術を身に着きたい、と思っても、そうでない  
自分がいます。

つまり、

あこがれと同時に壁である。  
しかしそれはあくまでも人の目よりも、自分自身と対決しなければならない。  
いわば壁といいながら、自分の意志で選ぶ壁であるということ。  
つまりここで逃げてしまうか、乗り越えるかという、それは自分の精神と肉体に

集中しているわけだ。

ただ技術の問題ではなく、スキーの場合は己れを乗り越えるという瞬間瞬間の決意なのだ。

その切実さ、純粹さがスキーにはある。

己れの敵は自分自身なのだから、挑む瞬間の感動は絶対的なのだ

スキーは技術だけではないところがいい。

むしろ技術などというワクを超えて挑むことが、このスポーツの本当の喜びであり、感動なのだ。

無条件に、無目的に挑むこと・・・

実は、もっとひろげて考えてみれば、これは実社会においても、生きて行く上の極意なのである。

成功や失敗は、結果にすぎない。

だから、生きる上で、「自分」を失ってはならない、といえます。

妥協したり、責任を逃れるような言動や仕事をしないこと、むしろマイナスにマイナスにと賭ける。

ここで、太郎さんの有名な「幸福」反対論、が飛び出します。

まことに変わっていると言われるかもしれないが、

私は「幸福」反対論者なのである。

危険のないところに生きがいはない。

死に直面する時にこそ、生命は燃えあがる。

それが歓喜なのだ。

歓喜と幸福はまさに正反対のモメントである。

スキーのハイ・シーズンは、12月末から3月上旬までと、3か月余りしかないのですが、この時の滑った感覚が、次のシーズンまで一年じゅう自分の身体に残っている気がしています。

( \* 1 ) 大前研一『遊ぶ奴ほどよくデキる!』小学館

( \* 2 ) 館内端 『中年スキーのすすめ 男 4 0 代、奮闘のシュプール』スキージャーナル

( \* 3 ) 岡本太郎 『人間は瞬間瞬間に、いのちを捨てるために生きている。』イースト・プレス

( \* 4 ) 『岡本太郎著作集 第 8 巻 岡本太郎の眼』講談社